

Ⅱ特別シリーズⅡ

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第106回

西大和学園高校の活動報告



鶴谷祥太
(西大和学園高等学校
企画開発部主任)

インドの高校生と西大和学園高校生の科学を通じた国際交流

①プログラムの概要

インドの首都デリーに位置するDAVパブリックスクールは、インドでも最高水準のラボトリー施設を備え、実験を通して科学的に考える力を養う教育を実践している学校です。科学発表会にも多数の生徒が参加し、大会でも多くの受賞経歴があります。一方でモラル教育(道徳教育)にも力を置く学校です。

本校はDAV校と過去2年間にわたってインドでの交流活動を重ねてきました。さらに両校の友好関係を深化させ、推進するために平成29年8月5日から12日までの8日間、DAV校の生徒10名と教員を日本に招聘し、本校生徒の家庭へのホームステイ、および本校SSHのプログラムである「ラボステイ」を通じた共同研究を軸とした交流活動を行いました。

②プログラムの成果

1、2日目の本校生徒の家庭へのホームステイでは、受け入れ家庭にとって宗教による信条や生活習慣からの食事の違いが一番の心配ごとでした。しかし、いざホームステイが配ると、始まると、礼儀正しくマナーの良いDAV校生たちは各家庭で大切に育てなされる、すっきり溶け込み、日本の家庭的な生活を通して文化交流を楽し

3、5日目の「ラボステイ」では、本校のSSH履修生とともに奈良先端科学技術大学院大学(以下NAIST)の研究室において3日間の研究実習を行いました。DAV校生たちは事前に希望していた研究室に分かれ、情報科学研究科の研究室に4人、バイオサイエンス研究科の3つの研究室に2人ずつ6人が配属されました。いずれの研究室でも高度で専門的な講義を受け、自ら設定した課題に対し本格的な設備を用いて実験やデータ解析を行い、考察を繰り返すことにより結論を導く課題解決型学習を行いました。恵まれた環境での研修プログラムはDAV校生たちにとって大変興奮し、強く感激した3日間でした。実施後のアンケートでも、大多数の生徒が「最も印象的であった」と回答し、そして多くの生徒が「将来研究者として日本にきたい」と答えていました。帰国後も研究を継続するため、今回指導していただいた先生からメールによるデータ提供を希望するほど、専門分野の論文に強く関心を持った生徒もいました。

6日目の大阪・奈良観光交流では、本校のSGH履修生徒が行程をプロデュースし、案内をしました。大阪グランフロントのナレッジキャピタルでは本校生徒がDAV校生をエスコートして、企業の展示を見学しました。奈良の街並みや東大寺、元興寺の散策では本

プログラム	
1日目	到着 ホームステイ先へ
2日目	ホストファミリーと過ごす
3日目	西大和学園SSHプログラム「ラボステイ」 (奈良先端科学技術大学院大学での研究実習)
4日目	
5日目	
6日目	大阪・奈良観光交流 (ナレッジキャピタル、奈良散策)
7日目	大阪市立科学館、京都大学総合博物館見学
8日目	振り返り 修了式



東大寺南大門下で記念撮影



ラボステイ中の記念写真



NAISTでの実験に参加



修了式での記念撮影



大阪市立科学館を見学

校生徒が観光名所について英語で解説し、時折、お土産屋の店主など地元の人との間で通訳もして両校の生徒の関係は大変親密になりました。

7日目の大阪市立科学館では、展示の説明がすべて日本語で英語の解説がなかったため、本校生徒が日本語の解説を読んでDAV校生に英語で説明しました。京都大学総合博物館

では、英語で書かれた解説を両校の生徒がともに読み、熱心に見学していました。どちらの施設でも、工夫が行き届いた展示技術の高さ、資料収集と保存についての技術の高さに感心していました。

8日目は振り返りのためのエッセイ執筆のあと修了式が行われ、帰国の途につきました。DAV校生たちの修了証とさくらサイエンスバッヂ、本校からのオリジナルスクールグッズのプレゼントを手にした時の、達成感による満足の表情がとても印象的でした。

今回の交流事業を通して、2年間にわたって交流を温めてきた両校の絆がますます深まったばかりでなく、普段別々に活動をしている本校のSSHとSGHの履修生が、ともに力を合わせ、企画を行いました。その点においても、大変貴重で意味のある機会となりました。

③今後の展望

今回ホームステイで受け入れた家庭となった生徒や、大阪・奈良観光交流および科学館・博物館見学で案内をした生徒を含む高校1年生の生徒は、今年度の10月に修学旅行でインドを訪れ、再びDAV校生たちと交流を行います。ますますの両者の絆の深化が期待できるうえ、さらには「ラボステイ」で培った科学研究による交流も見込まれます。この両校の関係を、今回のプログラムだけで終わらせるのではなく、さらに発展させ、またその関係が今後も長く継続していくよう、努力をしていきたいと考えています。

最後になりましたが、さくらサイエンスプランの実施に当たりご協力をいただきましたNAISTの先生方には深く感謝申し上げます。また、ご指導とご支援をいただいたJSTの方々にも改めて感謝申し上げます。